

オースティンからハートへ  
—ひと筋の道—

橋爪 大三郎

H・L・A・ハートが、彼の「法の概念」だけでなく、もっと多様な拡がりのなかで理解されるようになるのは、まことに結構だ。その拡がりには、L・ヴィトゲンシュタインやJ・L・オースティンなど、言語行使と社会現象との関連を探ったパイオニア達の悪戦苦闘と繋がっている。ところで、オースティンに造詣の深い土屋俊氏が、さきごろ興味ある展開を示された(「心の科学は可能か」東京大学出版会)。私はここに、オースティンの発語行為論からハート(ないしA言語ゲームV論)に至るひとつの明確な見通しが与えられ

ているように思った。ぜひこれを紹介したい。  
同書の1〜3章は、特にこの10年の間に進展した「心の科学」をめぐる諸業績の、批判的検討にあてられている。いわゆる表象主義にいたる諸流派が順に論破されるのだが、圧巻は何と言っても、それに続く第4章であろう。ここに重要な貢献が凝縮されている。  
前章までの検討で、結局「心」が言語とともにある(しかない)——それは、なされた行為の理由を説明するためのあるものである——ことを確認したあと、土屋氏はオーステ

インの周知の区分にたち戻る。A. 発語行為/B. 発語内行為/C. 発語媒介行為。このうち理解しにくいとされてきたのは、B(命令・約束など)/C(脅迫など)の区別であろう。だが、それぞれの行為についての報告も考えてみることにすれば、両者の違いがよくわかるはずだ、と彼は言う。  
土屋氏によると、Bは「私は発語内行為をする」というかたち、いわば「すなわちの関係」に対応する行為である。一方Cは、「目的と手段の関係」に対応する行為だ。Cの場合、その行為の成功とそれを報告する行為の成立とは無関係である。ところが、Bでは「行為の成立が自己循環的である」。つまり、発語内行為の成立は、それについての報告——「誰それが発語内行為をした」の真偽(成立/不成立)に依存してしまっている、という。これは重大な指摘だ。なぜこのようなことになるか。そ

れは、発語内行為の成立する条件を、事前にのこらず列挙しつくすことができないからである。「さまざまな条件が満たされていないことを示す事実が存在しない」かぎり、発語内行為というものは、さしあたり成立しているだけだ。こうして、ことばが(他の)ことはの行使を参照する、自己参照的循環が生じている。このような事態は、従来の科学論が想定していなかったものだ。  
議論はさらに、知識、ひいては記憶・知覚といった現象にも同様の着眼が用いられることを示唆するところで終わっている。

以上の行論は非常に刺激的だった。かつて土屋氏は私宛ての私信のなかで、「ハートに対しては(ヴィトゲンシュタインよりも)オースティンの方が方法・内容とも重要でしょう」と走り書きしておられたが、理解できなかつた覚えがある。けれどどいまや、その含意は明らかとなった。

同書の最重要概念である自己参照的循環を、A言語ゲームV論の言い方に直してみると、要するにルール環(行為の効力が身体のおいだを循環すること)にはかならない。発語内行為は、何らかの言語ゲーム(を成立させる慣習の共同体)を想定することによってしか、理解できないと言っているのと同じだ。  
ハートの法理学は、この理解にとどまらず次のように主張した——紛争を解決するための明示的な裁定機構は、紛争が出現するのと同じレベル/二次ルールが分離する。これはオースティンにはない、ハート独自の論点だ。  
だが注意すべきなのは、ルール(に基づくゲーム)の分離が、必ずしも言語の分離(たとえば、言語/メタ言語)の分離をいみしないことである。普通の社会生活も、専門家の裁定のゲームも、大体同じ言語の

\* A Path From J.L. Austin to H.L.A. Hart, by HASHI, ZUME Daisaburo 1987.  
(一九八七年二月稿)  
(社会学専攻)